



ご挨拶

今年の梅雨は期間が長く様々な異常気象を巻き起こしました。豪雨や地震…日本各地に深い傷跡を残した事は皆様のご記憶にも新しい事と思います。また数十年に一度しか見られない皆既日食も、世紀の一大イベントだったにも関わらず雨や曇り空でがっかりされた方も多かったのではないのでしょうか。

下記の第2回研修講座報告でも触れておりますが、モクモクファームの吉田氏に講演を頂き、また非常に貴重なお弁当の発注まで引き受けて下さいました。沢山の申し込みが入り、手作りウィンナーや野菜がたっぷりの豪華なお弁当に舌鼓を打ちました。

その吉田氏の講演で経営者であるにも関わらず、利益優先とせずエコも追求していく姿勢にただただ感銘を覚えました。先述の異常気象や温暖化、大地震など地球環境の悪化が年々酷くなってきている現状において我々も1人の人間として今まで以上に地球環境に気を使い生活していく重要性を再確認する夏となりました。

今年度の三事研組織について各部の紹介をしていきたいと思っております。

研究部では、平成21年度からの第6期中期研修計画の実施について研究を進めています。

第6期中期研修計画

研修主題 『 教育活動の活性化に向けた学校事務の実現 』

研修主題の実現に向けて

スケジュール

年度	共同実施三事研モデル	教育活動活性化計画（仮称）	大会等
21	原案提示 意見集約	全体構想（略案）の提案 意見集約	東海松阪大会
22	「モデル」（一次案）提案 意見集約	全体構想（案）の提案 意見集約	県大会
23	「モデル」（案）提案	活性化計画の原案提案（分科会） 意見集約	県大会 50周年記念大会
24		改定（一次案）の提案 意見集約	県大会
25		「活性化計画（案）」提案	東海三重大会 全事研石川大会 分科会運営
第7期中期研修計画			
26		「活性化計画」実施へ	県大会 全事研静岡大会 分科会運営

※「共同実施三事研モデル」、「教育活動活性化計画」（仮称）は、いずれも、学校がよりよくその役割を果たし、活性化した教育活動をとおして子どもたちの豊かな育ちを実現していくことを目的としています。そのために学校事務は何ができるのか、そして、事務職員はどのように学校活性化を推進していくのかを明らかにしたものとして「教育活動活性化計画」（仮称）を策定し、学校事務の手段の一つである共同実施は、「共同実施三事研モデル」として、その一部を構成する項目という位置づけになります。

21年度は、「私たちは本来の力を発揮できているか」ー共同実施の検証ーをテーマに進めます。

平成18年度、各市町の学校管理規則に位置づけられ、三重県全域で本格実施となった「共同実施」は、標準的職務に示された学校事務職員の役割を共同実施の組織力で十分に発揮し、学校教育目標の実現に向けた学校経営の支援を実現することを目指してきました。

県内全域で一斉に本格実施をスタートさせることができた要因を整理することで、私たちのもてる能力や発揮できる力を確認します。

そして、本格実施からこの間の実践を通して、

○私たちは本来の力を発揮できているのか。

○私たちは何のために本来の力を発揮するのか。

○本来の力を発揮するためにはどうすればいいのか。

などの現状と課題を整理し、さらなるステップアップした学校事務の創造にむけた未来像を描きたいと考えています。

私たちは共同実施をとおして、“組織”を意識し、組織を感じながら、組織の中で日々の仕事をするようになりました。仲間を大切に思い、仲間とともに一步を踏み出すことの楽しさが職業人生にとって大きな転機になりました。ひとりの大きな一步より、みんなで少しずつ進むこと。それは、今の成長にとっても大切なことですが、世代交代を視野に入れた未来へのプレゼントでもあります。

会員みなさんと夢を語り、未来を語り、『教育活動活性化計画』（仮称）をつくりあげていきたいと思えます。そのために、今後、幾度かご意見をお寄せいただくようお願いすると思えますのでよろしくお願いいたします。

ひろば担当より

ひろば第38集への投稿ありがとうございました。

当初の投稿の〆切は過ぎましたが、まだページに余裕がありますので、投稿していただける方がありましたら、9月4日（金）までに支部委員さんに提出してください。

なお、執筆の詳細については、支部委員さんか椿小学校 山中までご連絡をお願いします。

12月予定の発刊まで楽しみにお待ちしております。

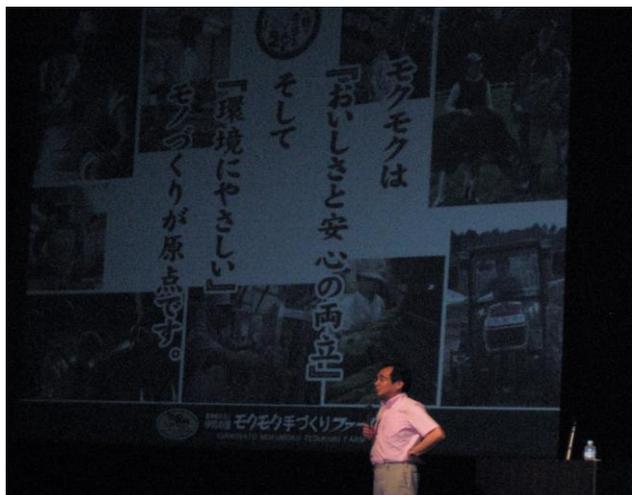


第2回研修講座(7/24 伊賀市文化会館)

第2回研修講座では、モクモク手づくりファームの吉田修氏、上野高等学校の宮崎恵美子氏、京都産業大学文化学部教授西川信廣氏など様々な分野で活躍されている方をお招きし、バラエティに富んだ講座となりました。

講座1 「モクモクの挑戦 ー食と農のあり方に新しい風をふかせますー」

農業組合法人 伊賀の里 モクモク手づくりファーム 専務理事 吉田 修 氏



モクモクファームの営業理念をとおして農業、畜産業について大変興味深い話をテンポよく語って頂きました。モクモク特製お弁当は大変好評で、お話の余韻をかみしめながら味わい、より深い学びになったのでは・・・

営業利益とエコを両立する企業姿勢を支えているのは、モクモクの実現しようとする豊かな未来の『ビジョン』であり、そこで働くひと、モクモクの商品を買った人も、その未来のあり方に共感し、食と農の新しい文化を創っていくのだということを感じました。

お話は、成功したこと、失敗したこと、厳しい経営状況もふくめて、率直で、力強く、かつ冷静に、チャレンジ精神に充ちた熱いおもしろい話が伝わってきました。

学校経営も学校に関わる人々とともに、めざす学校像を共有するためには、明確な組織のビジョン表明が欠かせないことを学びました。

「みなさんは、児童からサンキューレターをもらったことがありますか？」と問いかけられました。事務的でなく学校で存在感を示し、感謝をされる働きをしなければならないとの事です。私たちが公務員という枠を超え、1人の人間として、そして仕事をとおして、大切にしていかなばならない大事な物を沢山伝えて頂きました。

講座2 学校事務職員として思うこと

三重県立上野高等学校 事務長 宮崎 恵美子 氏



県教委に在籍された経験を元に、現在高校事務長でありながらも三重の小中学校事務への実態や将来についての展望を語って頂きました。

それだけに、より学校事務の将来について危機感を持たねばならない緊張感も強く感じる講演となりました。

三重県立上野高等学校事務長である宮崎さんは、以前県教委に勤務され、小中学校の旅費・給与を担当されました。

現在の勤務先の上野高等学校は、平井堅・椎名桔平をはじめとした著名な卒業生を輩出している、生徒数約 1000 名の学校です。

普段は1F にある事務室で仕事をされていますが、職員室は2F、また各棟には担任用の部屋があるため、先生方に一斉に連絡をするのが難しいことがあるそうです。

また、予算は学校裁量で執行できるため、今年はこちらを重点的にといったように各校の実態に合わせて執行されています。

事務室には 5 人の職員が配置されていますが、県内で 1 番の大規模校の白子中学校は生徒が 900 名近くいても事務職員は 2 人配置。授業料等の業務の違いはあるものの、この人数の差が何によるものかわからないとのことでした。

現在、県立学校では総務事務の集中化にむけて準備がすすめられています。「総務事務の集中化かわら版」は、職員への周知のために配っているものです。総務事務の集中化がされると、事務室の人数は 5 人が 4 人、3 人といったように少しずつ減らされる可能性があるのではないかと懸念しておられました。

講座3 「平成20年度中央研修環流報告」

亀山市立川崎小学校 主幹 久保田 幸子さん 名張市立名張中学校 主事 松本 真美さん 津市立美杉中学 主査 市野 奈津子さん



昨年度の2月16日（月）～20日（金）の5日間、つくば市にある独立行政法人 教員研修センターで行われた、中央研修を受講された3名の方より環流報告をしていただきました。

最初は、やや緊張されている様子にも感じられましたが、貴重な経験を語られていくうちに、皆さんの口調もだんだんと熱を帯び始めました。

中央研修では、「特色ある自校の取り組み」「教育改革の流れ」「財政制度」「新学習指導要領」「学校評価と学校運営」「信頼される開かれた学校づくり」「学校組織マネジメント研修—これからの校長・教頭等のために—」「学校におけるリスクマネジメント」「学校運営を支える学校事務職員の役割」…と、学校の組織運営を担う事務職員に必要な研修が幅広く行われました。様々な研修を体験する内に聞く姿勢が受身的でなくなり、研修への意識が高まっていくのを感じたそうです。

3名の方からの5日間の濃密な研修の報告の還流を受けて、これからの学校事務職員像について考える機会となりました。

講座4 「教育改革の動向と学校事務職員の役割」

京都産業大学文化学部 教授 西川 信廣 氏



西川先生はご自身を、学校を良くしていく取り組みを事務職員とともに進めていくスタンスだとおっしゃいます。助言者としてではなく、ともに実践していくパートナーとして事務職員に送るエールが、私たちの心にしみてくる理由のひとつではないでしょうか。

教育改革を推進する役割を果たす学校事務を実現しなければならないこと、そのためには、職務の明確化から職務開発へ、職務開発から教育改革推進事務へと変革しなければならないこと、その主体的な取り組みを事務職員自らが展開しなければならないことをお話し頂きました。そのとりくみのひとつとして、共同実施をいち早く始めた三重の共同実施が学校間連携へ広がりを見せている点に注目しておられます。

純粋な学校経営研究の視点からではなく、学校にとって事務職員は不可欠であるとする学校事務職員論の立場から実践研究を進められ、事務職員が実績を積み重ねる事の必要性を主張されました。

また若い世代の離職率の高さにも注目し、魅力ある職として位置づけられる努力を今の世代はしなければならない重要性を説き、学校事務職員の意識改革の必要性を痛切に感じる講演となりました。

西川先生の力強く、早いテンポの語り口から、次々と飛び出す一見挑戦的とも思える言葉は、私たちの心に揺さぶりをかけて頂きました。アンケートには、「帰ったら共同実施の検証をしたい。」「重い課題を背負った気がした。」など、現状を見直すきっかけになったという感想や、「リスペクト」、「リストラ」、「地域連携」など気になるキーワードを胸に刻んで帰ることができました。